

母の三回忌によせて

山本 洋子



早いもので、母が亡くなってから二年が過ぎた。この二年間で変わったことといえば、長野から東京に戻ったことだ。

母が救急車で運ばれたと父から連絡を受けたのは、日曜日の昼前で、ちょうど、お昼のやきそばを子供たちに取り分けている最中だった。「これから手術で、携帯が使えなくなる。連絡の取れない兄弟達に洋子から連絡しといてくれ」。

急なことで、父もこの時は、極力冷静に普通に話していた様に思う。私は思わず「えっ」と絶句した。よりによって頭を……。自称『コンピュータおばあちゃん』と言っていた

母の頭脳を神様は破壊したのか。

他の兄弟は知らないが、私は父から「八割、脳が死んでいる」と聞いて、もうダメだと思つた。さらに長野と鹿児島というどうしようもできない距離に腹が立ち、電話をきると、なるべく子供たちに気づかれないように、泣きながらやきそばを食べた。

母は、生前、入来を全国区にしたいという野望を抱いていた。私が何か電話で相談する度に、「待ってなさい。そのうちママが有名になって、入来も有名になるから」と自信たっぷりに話していた。電話口で、何を根拠にそんなことを言っているのだろうと聞き流していたが、母の葬儀で、政界からのそうそうたる弔電の数や参列者を目の当たりにして、本気で入来を売り込もうとしていたのだと再認識したのだった。

そんな夢なかばで逝ってしまった母の願い

を、意外な人物が叶えてくれることになる。もしも、すべてとは言わないまでも、この世で起きる現象はイメージから造られているのだとしたら、母が亡くなってから、嘘ではなく私は漠然と、「鶴瓶さんの番組が入来に来ればいいのに」と常々思っていた。入来を全国に知らしめるには、有名人のテレビ番組に出るのが一番手っ取り早いと思っていたのだ。

歳月は流れ、無事に一周忌が過ぎたある秋の夕暮れ、なんと本当に鶴瓶さんが番組で入来に現れた。NHKの『家族に乾杯』という全国区の旅番組である。

父からその話を電話で聞いて、驚いたのはい言うまでもない。まして番組とはいえ、父と鶴瓶さんが酒を酌み交わして仲良くなり、なんと母の三回忌には追悼落語をしに来てくれるという。

オンエアーで画面いっぱいに映し出された

母の写真をテレビで観たとき、「母は死んでない」と思った。生前の希望通り、全国に入来の地名と共に自分の顔と名前が知れたのだから。

それから五月の三回忌が無事に終えるまでの間、一番準備に奔走してくれたのは姉だった。私も長野からの引っ越しがなければ鹿児島まで手伝いに行きたいところだったのだが、何しろ引っ越し代に加えてアパートの礼金、敷金に子供の幼稚園の入学金と制服代などでそれまで貯めてきたパート代はすべて泡のごとく消えてしまった。

五人も兄弟がいる中で、結局はみな姉におんぶに抱っこという、まあ、予想通りの展開になった。なにしろ、プライベートで鶴瓶さんが来てくれるのだ。しかも奥様まで連れて。しつかりと準備をして出迎えなければ失礼になる。一週間も前から嫁ぎ先の四国から鹿児島

島入りをして、大掃除やら決めた段取りをこなししていく姉。しかし、イベントにハプニングはつきものである。姉は、三回忌を控えた前日に、右足をひねって救急外来する騒ぎとなってしまった。

私たち家族は、格安航空チケットが夜の遅い便しか手配出来ず、飛行場から最終の高速バスで入来へと向かった。いざ、実家へ着くと、父は普段ならもうとっくに就寝している時間帯なのであるが、次男家族と酒盛りの真っ最中で、すでに出来上がっていた。酔っ払いの父に「洋子が来るのを待っていた」と、ここでまたさらに乾杯。聞けば、もう三時間以上も飲んでいるとのこと。なかなか集まらない子供や孫が、三回忌を前に顔を並べたのがよほど嬉しかったに違いない。しかし、ここでの飲みすぎが原因で、その後、父はトイレに向かう途中、大コケしてしまい、なんと

下唇を。パツクリ切って流血するという、姉に続く怪我騒ぎとなるのだった。

三回忌当日、右足負傷で思うように動けないでいる姉の指揮のもと、その穴を埋めるべく、親族一同てきぱきと指示に従って動いた。

父はというと、よほど強く打ったのか、パツクリ切った下唇が想像以上に腫れてしまい、まるで松本清張のような人相に様変わりしていた。

三男による法事をつつがなく終え、食事の接待が済むと、姉の号令で一氣に片付けが始まり、鶴瓶さんを迎え入れる準備にとりかかると、お酒が入り、まだ喋り足りないでいるほろ酔い気味の客に対しても「時間です」と容赦なくお膳を下げる姉。しかし、その客人もまた、鶴瓶さんの落語を楽しみにされて来ているのだから、いたしかたない。すべては、『鶴瓶さんの追悼生落語』という前代未聞の

できごとを成功させるためなのだ。

時間通りに鶴瓶さんは、妻とマネージャー、弟子一人を携えてやってきた。玄関に入るなり、我が家の広間に三十人はいたであろう母を偲ぶ方たちのどよめきと拍手が沸き起こった。

鶴瓶さんはまず母の遺影にお線香を上げると、私たち親族と軽く挨拶を済ませ、今日の落語の段取りを父と確認した。なんと、今回の鶴瓶さんだけでなく、弟子の前座も取り入れてくれるとのこと。弟子が落語をしている間に着物に着替え、父との軽い漫談後、追悼落語をしてくださると言う。

実際、口は清張、舌は毒舌な父との漫談はコンビかと思うくらい息もぴったりで面白かったし、この日のために鶴瓶さんは移動中にもマネージャーを相手に練習してくれた「錦木」というホロリと泣ける新作落語を披露し

てくださり、律儀で誠実な人柄が語りにも表現されて、本当に夢のようなひとときを過ごした。

思いもよらぬサプライズの連続で終えた母の三回忌は、賑やか好きで、町の人が喜ぶイベントを数多く企画し成功させてきた、いかにも母らしい法要であった。

そして何より、生前こんなに一度に顔を会わせた機会もなく、いつもは父独りで暮らしている広い屋敷に、兄弟含め親族一同が集まったことを、天国の母はとても喜んだに違いない。芸能人という枠を超えて、人として父との約束を果たしてくれた鶴瓶さんに心から感謝したいと思う。





漫談中のお二人



鶴瓶ご夫妻と入来院家子女